異常で過負荷な臆病者と無礼者

熱血バレー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異常で過負荷な臆病者と無礼者

【Ｎコード】
Ｎ６２９６Ｘ

【作者名】
熱血バレー

【あらすじ】
神の手違いで死んだ主人公、二夕子樹（ふたごいつき）。証拠を隠すため転生させられたのは、めだかボックス？？
二重人格である主人公は、果たしてどうなるのか？
（作者は、文才の欠片もないのでご了承ください）

プロローグ　上（前書き）

まだ完結していないのが２つもあるのに投稿しました。←この作者はバカです。

プロローグ　上

「ここはどこ？」

眼鏡をかけた少年が目を覚ます。

ここは、真っ白で何もない世界だ。そして、少年の前に一人の男がいた。

「ここはどこかって？現世と冥界の狭間さ。君は、さっき死んだ。」

「？？？」

「死因は、交通事故。少女を助けようとしてね。」

少年は、思い出す。

数時間前

登校途中、居眠り運転のトラックが少女をはねようとした。少年は、なにを考えたのでもなく勝手に体を動かしていた。それで死んだ。

「思い出したかい？まー君が死んだのは僕の手違いでさ。君に「あのーあんた誰ですか？」は二次げｎ「無視すんなーーー。葬式始めんぞ。」」

「ごめん、ごめん僕は神さ。見習いだけど・・・。（何だ今の殺気

？）」

「神？？」

「そう神だ。見習いだけど・・。っで話続けていい？」

「どうぞ、自称見習い紙さん。」

「紙じゃなくて神だから。後見習いを強調するな。」

「すみません。自称神さん（笑）」

「（笑）邪魔だよねー。もういいよ。っでさっきの続きね。」

「つまり、神（あんた）の手違いで死んだ俺を、証拠を隠すために転生させるってことだろ。」

「？？（全部言われたよ。）御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらうよ。」

プロローグ　上（後書き）

プロローグなのに二話になりそうです。なんて、文才がないんだ。

ちなみに、二タ子っていう地名は実際にあるそうです。

プロローグ　下（前書き）

プロローグ2話目です。

プロローグ　下

「御察しの通り。で、君たちのことを調べたけど、『めだかボックス』に転生してもらうよ。」

「君たちってことは人格が二つあることに気づいたか。っま、死因を思い出したころから裏(オレ)が出たな。あとこのことは、アイツには内緒だからな。あとめだかボックスの世界で原作ブレイクしてもいいのか。オレのためにも、アイツのためにも。」

「はー、わかった。で、気づいているとは思うけど現世の時点であの子は、異常(アブノーマル)を持ってんね。」

「見稽古(アイゲーム)のことか？」

「それそれ。で、転生するに当たってちょっとプレゼントがあるんだ。」

「何だ、それは？」

「神からの贈り物(プレゼント)
？お金の心配なし
？それぞれボクから異常(アブノーマル)と過負荷(マイナス)をプレゼント
？お互い５つまでお願いＯＫ
ただし、？であなたは異常は持てない。逆も一緒。
こんなもんでどうですか。」

「まあいい。で？はなんだ。オレにはどうせ過負荷だろうが。」

「君には、裏切りの楽園（トレチャリーティル・ナ・ノーグ）を、あの子には、憎まれ知らず（アンリセント）をあげるよ。」

「面白い、じゃーそろそろ連れてってくれ。めだかボックスの世界へ。」

「OK！逝ってらっしゃい。」

「おい、字がちg」

さあ、第二の人生、スタートです。

プロローグ　下（後書き）

見稽古は、刀語の鑢七実を参考にしました。
また、裏切りの楽園は、Ｐａｒａｄｉｓｅ　Ｌｏｓｔ　のサビからとりました。
両方大好きです。
そして、最後に

プロローグ長！！

登場人物紹介

二夕子樹（ふたごいつき）　表人格

性別　男

見た目　そこそこイケメン。というより女顔。
いつも眼鏡をかけている。髪は、基本黒。

一人称　ボク

年齢　１６歳

好きなこと、もの　人助けをしている人
野菜

嫌いなこと、もの　人が傷つくこと
動物（魚も含む）
臆病者（自分）
肉

異常（アブノーマル）
見稽古（アイゲーム）

見ただけで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の１回は、５０％しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。

憎まれ知らず（アンリセント）
神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ＯＮ、ＯＦＦの切り替えができる。

二タ子樹（ふたごいつき）　裏人格

性別　男

見た目　表とそう変わらない。ただし、少し目がつり上がる。
眼鏡はかけていない。髪は、基本白。

一人称　オレ

好きなこと、もの　人を傷つけること
人を貶すこと
肉

表人格

嫌いなこと、もの　偽善者
ナルシスト（誰のことかお分かりですね）
敬語
野菜

過負荷（マイナス）
裏切りの楽園（トレチャリーティル・ナ・ノーグ）
異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ＯＮ、ＯＦＦ可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は２００％使う

ことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることができる。（1人だけ）

まーこんな感じです。また、異常や過負荷は増やしていきますので、ある程度たまったら能力のみ紹介したいと思います。

オレからボクへ（前書き）

ついに、転生しました。

オレからボクへ

「ここは、どこだ？」

二タ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何だ、これ？」

『これを読んでいるということは無事転生できたんだね。もし君が裏人格なら頼みがあるんだ。机の下に表人格用の手紙があるからこの手紙を読み終わったら、その手紙を机の上においてほしい。つまり、　裏人格用の手紙を読む→その手紙を抹消→机の下の表人格用の手紙を見つける→机の上に置く、ってわけだ。何でこんなことをするのかというと、この世界にまだ裏人格（キミ）は、存在してはいけないんだ。でも大丈夫。いつか君も原作世界にいてもよくなるから。まーそんなわけで当分君は登場しないでね。それじゃーバイバーイ。

ｂｙ神』

「何の予告もなしにオレをこの世界に連れてきやがって、それで、この手紙か。まったく世間知らずもほどがある。（オレがいえないが）まあいい。オレは、少し寝るか。」

オレからボクへ（後書き）

最後に、
裏人格「ここは、どこだ？」
神「もちろん、箱庭総合病院ですよ。」
表人格「つ、ついに来たー。」
ちょっとキャラ壊れました（笑）

スタート　第2の人生（前書き）

二話続けて短いですねー。
あと、樹の顔を女顔にしました。でも男に代わりはありませんよ。

スタート　第2の人生

「ここは、どこ？」

二タ子樹は、ベットで寝かされていた。そして、机の上には、置手紙が。

「何、これ？」

『これを読んでいるということは、無事転生できたんだね。真っ白な世界でも会ったと思うけど覚えているかい？ボクは、神さ。で、君はボクの手違いで死んでしまったんだ。だから君にはめだかボックスの世界に転生してもらったんだ。突然の話で驚いているかも知れないけど君の好きな漫画なんだからいいでしょ。この世界では、原作ブレイクしてもいいし、異常も使っていいよ。ちなみに君の持っている異常は見稽古（アイゲーム）と憎まれ知（アンリセント）らずなんだけど分からなかったら第3話（とうじょうじんぶつしょうかい）を見てね。あと、そろそろ君とのところに善吉君が来ると思うよ。その後、めだかちゃんにも会い、善吉君の名言が出るといいね。じゃ、バイバーイ。

ｂｙ神』

「ここが、めだかボックスの世界？あっ、善吉だ。」

「僕は人吉善吉。　君の名前は？　一緒に遊ぼうよ！」

こうして、ボクの第2の人生が始まった。そして、１５歳の春、旧友人吉善吉と1年1組で再会を果たす。

スタート　第2の人生（後書き）

善吉の名言の意味は分かりますよね。ちなみに、病院でめだかや禊、飛沫達にも会っていて、病院は今でも残っています。↑原作ブレイク出たー！！

また過去については、番外編としてやっていこうと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言うけど忘れられた人間の気持ちを考えたことあ

サブタイトルは、いつもこんな感じにしたいと思います。

人間は忘れる生き物だ、とよく言うけど忘れられた人間の気持ちを考えたことある？

１５歳の春を迎えた僕は、今日もまた校門をくぐっていた。そして、常常思っている。箱庭学園でか！！

っで、今日は、異常な女が人の上に立つ日だ。そう、今日は新生徒会長発表日。

新生徒会長の黒神めだかが全校生徒の前で演説を始める。

「世界は平凡か？」

異議なし。

「未来は退屈か？」

たぶんそーじゃなーい。

「現実は適当か？」

Ｙｅｓ　ｏｆ　ｃｏｕｒｓｅ．

「安心しろ、それでも生きることは劇的だ！」

安心なんかできっこない。ボクなんか毎日毎日恐怖の連続だ。

「そんなわけで本日よりこの私が、貴様達の生徒会長だ！」

今までの前置きは必要でしたか？

「学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい。」

悩み事は、いえないからこそ悩み事なんだよ。

「２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付ける。」

それは、ストーカーにまで発展する。

ってなわけで、めだかちゃんの発言に一言ずつ文句を言ってみた。でもボクは、それを面と向かって言えない。そんな、臆病者（ボク）が嫌いだ。

ボクは、臆病者（ボク）を恨みながら1年1組へと向かう。

すると、原作と同じく善吉と一人の少女が話していた。言わずも知れたブラックホールの胃袋を持つ不火知である。

「しっかしあのお嬢様、全校生徒を前によくあんな啖呵が切れるもんだよ！人前に立つのに慣れてるっつうかさー」

その女子の言葉に、そばにいた男は反論する。

「カッ！あれは人の前に立つのに慣れてるんじゃねーよ！人の上に立つのに慣れてんだ！」

そんな会話を聞きながら、ある問題に直面した。なぜか、二人は、ボクの席のところで話しているのだ。せめて善吉とはもっと感動的

に再会したかったが、仕方ない。

「ちょっとそこいいですか？」

「あっごめんごめん、ってお前」

（感動的ではないが、気づいてくれるだろう。）

「どっかで俺と会った？」

っな、完全に忘れられている。まーいっか。他人のふりにて気づいたら脅かそう。実質、２ヶ月しかあの病院にいなかったし。

「えっ初対面のはずですが。」

「名前は？」

これって気づいてもらうチャンスだよね。うん、きっとそう。

「二タ子樹」

「えっ！！」

驚いてるぞ善吉。やっと気づいたんだね。

「男だったんだ。俺はてっきり女だと思ってた。」

「私も、私も」

「これから、一緒のクラスだ。よろしく。」

「よろしく☆」

「よっよろしくお願いします。」

ショックだ。完全に忘れてる。これを若年性アルツハイマー病と言わずになんと言うだろうか。

と、落ち込んでいるボクの横で善吉が「俺は生徒会には入らない。」なーんて言ってめだかちゃんに強制連行（笑）。ここで、ボクにもうひとつの疑問が。

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょうか、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。二タ子同級生。いや、“樹”。」

「あのーなんでボクまで強制連行なのでしょうか、生徒会長さん。」

「よそよそしい呼び方をするものでないぞ。昔のようにめだかちゃんと呼ぶがよい。二タ子同級生。いや、“樹”。」

「おっお前生きてたのか。」

「いや、人を勝手に殺さないでくださいよ。でもなんで死んだことに？」

すると、二人が説明を始めた。

長かったのでまとめるとこうだ。

?.病院破壊未遂の容疑者になる。（もっとも、飛沫達の“偉業”を阻止しすべての罪を自分のせいとし、助けたため）

?.転院指令を受ける。（いわば、追放）

?.転院先は箱庭総合病院の末端施設であったため、今まで以上の実験が行われるという話を聞く。

?.二人は死んだと思い込む。

「、というわけだ。」

「でも生きててよかったぜ。でも、なんでお前が1組なんだ？1
3組でもおかしくないのに。あと・・・。」

「あと？」

「お前、いつからそのー、女らしくなったんだ。」

「善吉よ、まさか樹に恋したわけではあるないな。樹は、あくまで男だぞ。」

「あくまで、ってボクそんな女に見えますか？」

「「見える！！」」

（ハモったってことは・・・）

樹の頭の上に負のオーラが漂う。

「そんな落ち込むでない、樹よ。」

「だって、ボクは正真正銘男ですよ。なのに、女だなんて。」

「だから、女だじゃなくて女に見えると言っただけだぞ。（こいつの心って昔から弱かったっけ？）」

「まーもういいです。で、1組にいる理由ですがまだ、理事長が気づいてないだけでたいした理由はありませんよ。」

「わかった。やっぱりお前異常なんだな。でもいいよ。こうして

昔と同じように話ができるから。」

って、話は進み、今ボクは剣道場の前にいる。

「あ？誰だお前ら。」

「１年１３組ｒｙ。」

今後面倒なのでさっさと説明すると、不信任２％の人たち（門司先輩ら）にめだかが『上から目線性善説』を披露し、それｋ

「おい、樹。どこ見ておる。もちろんお前も素振り千回だぞ。」

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく　上（後

樹「まだここまでは、よかった。原作を読んでいるのでこの展開も予測していた。　だから耐えられた。でも次回、・・・。」

さぁどうなるでしょう。

剣道三倍段って言うけど元がゼロの奴に向かって自慢すると恥をかく　下（前

祝ＰＶ３０００　＆ユニーク７００
見た下さった方々本当にありがとうございます。
今後も『異常で過負荷な臆病者と無礼者』をよろしくお願いします。
感想大大大募集中！！！

門司先輩方の悲鳴後に、剣道場にボクの叫びも響いた。

そして、めだかが倒れる。・・・。っておい！！だれか突っ込んでほしいよね、ココ。あの異常の塊のような人が倒れたんだぞ。ボクの叫びで。

「すまない。ちょっとめまいがしてな。ここ数日頑張りすぎたな。」

おい、その言葉、あなたがもっとも言ってはいけない言葉じゃん。

（えっとー、まー原因はめまいなんだね。よかった。）

というわけで、一件落着。とは、いかないのが現実の厳しさなんだよ。今日もまた、ボクは剣道場に来た。というより、善吉に誘われ、行ってみたらこの有様である。

「お前も来たのか。もちろん来たならそれなりのお礼をしなきゃいけねーよな。」

「お礼なんて結構です。では、ボクはこの辺で。」

「お、じゃーな。っとでも言うと思ったか？甘いんだよ。」

（あと少し、あと少しで門司先輩達が起き上がる。）

「日向君？なっなんでこんな風になっているの？まずそこを教え

てもらいたい。」

「一生徒会長（バケモン女）に草むしりを頼んだんだけど、うまくいかなくてねー。だから変わりにボクが草むしりをしているんだ。」

「じゃー雑草、って門司先輩方のことなんですか？」

「もちろん。あ、でもこうやって時間稼ぎしても無駄だぞ。あの女、今頃役員募集演説の真っ最中だから。」

（ココで、門司先輩の回想場面だな。いま、ボクは何を考えていようか？）

「ま、待てよ。勝手なこと吠えてんじゃねーよ。たったいま思い出したわ。俺は昔剣道少年だったんだよ！！」

（き、キター。門司先輩かっこいい）

「うっぜ。ドロップアウトした奴が簡単に改心して立ち直ろうとしてんじゃねーよ。剣道三倍段って知ってっか？ボクはあんたらの三倍強いって意味だ。」

（ココで善吉が立ちあが・・・らないっておい！！ココで原作ブレイクしちゃってんじゃん。やっぱボクのせいかー。だったら）

「し、真剣白刃取りだと？」

「そういえば、さっき剣道三倍段って自慢してたけど、初心者のボクには初心者になるの？ほら、０×３＝０でしょ。それとも、実

力って意味だったの？ならボクがそのプライドを切り裂いてあげるよ。」

そして、門司先輩から木刀を借りる。（正式には、無許可だか）

「どいつもこいつも面倒くせー。お前剣道三倍段って知ってっ「面倒くさいのはあなたです。ホント、ボクが安心できるよう静かにしててもらいますよ。」ッガ」

ってことで解決です。善吉は、ボクの声で驚いたらしくそれで目が覚めたそうです。

その後、日向君も、めだかに『上から目線性善説』を披露され、無事改心（？）したとさ。

っえ！樹、キャラ変わりすぎって？あれは、門司先輩方を雑草扱いしている日向君にきれたからだよ。何が剣道三倍段だ。っと言うことを今日も言い出せず、胸に溜め込む臆病者（ボク）だった。

人に何かおごってもらうとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだと

樹「サブは、ボクの心の叫びです。」

有明先輩の話は、カットさせていただきます。本当にすいません。

人に何かおごってもらうとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだと

ここは、食道だ。

おい、字が違う！！食堂だよ。不知火（ブラックホール）と一緒に。

なぜ、こうなったかと言うと・・・

昼食を取ろうとしたときのことだ。いきなり、善吉が

「樹、お前も今から食堂へ行くところか？もしそうなら、一緒に行こうぜ。」

「うん、いいよ。ところで、隣の人は？」

「あっ、こいつは、「不知火　半袖だよ☆」ってことだ。」

「不知火ってことはまさか、理事長の孫ですか？（まー知ってるけど）」

「うん、そうだよ☆」

という訳で、ボクは今食堂にいる。でもなぜか二人っきりだ。善吉はトイレにいくと言いながら帰ってこない。

「あれ？善吉遅いねー。善吉には樹に言うなって言ってたけど言っちゃうね。今日、樹のおごりってことだから。」

「えっ？今なんて？」

「だから、樹が今日の罰ゲーム(おごり)ってことだから。」

「ぜ、善吉の裏切り者ーーーーーーー！！！」

こうして、ボクの財布から諭吉さんが一人旅立っていった。

「待って、待ってくれー。諭吉殿。」

「何一人で言ってんの。馬っ鹿みたい☆」

そのころ、神は

「皆さん、久しぶりの登場です。こう見えても、毎日樹のことはリアルタイムで観察しているからね。で、お金の問題なんだけど、電気代とかは、何とかなるけど現金はねー。月１０万しか払えないから、おごりは残り９回しかできないね。ドンマーイ、樹。」

「ヘークシュン！」

「樹、風邪引いたのか？」

「うるさい、裏切り者。善吉のせいで精神病にかかりそうだよ。夜もこれじゃー眠れないじゃないか。」

「有明先輩みたいなこと言うなよ。」

「なら善吉が言わせないよう、これ以上ぼくに精神的ダメージを

与えないで欲しいなー。」

「ごめん。」

「まーいっか、じゃーね。また明日。」

「おう、じゃーな。」

今日は、今日で散々な日だった。こんなときに、もしも、ボクの怒りを買ったら、またキャラ崩壊しちゃいそう。あれ、今いたのは、

「貴様。王である俺の目の前を横切って走ってよいと思っているのか？」

よし、君はボクの怒りを買ってくれた。悪いけど、きょうは、そんなに安くないからね。

「もちろん。ってか、お前誰？まさか、自分で王様気取り？マジださ。ナルシストにも、程があるがあるぞ。お前のあってもないに等しい脳みそで考えろ。カスごときの分際が。」

やっと、裏人格（オレ）が登場か。

人に何かおごってもらうとき、それなりのマナーというか程度を考えるべきだと

やっと裏人格の登場です。やっぱ、現世でも相当嫌ってたからしかたない。

最後のセリフの中に二人の言葉が入ってます。

だいだいオレは神だとか天才だとかといってる奴に限って実はたいしたことない

王士ファンの方々、申し訳ございません。

祝ＰＶ５０００、ユニーク１０００

だいだいオレは神だとか天才だとかといってる奴に限って実はたいしたことない

「もちろん。ってか、お前誰？まさか、自分で王様気取り？マジださ。ナルシストにも、程があるがあるぞ。お前のあってもないに等しい脳みそで考えろ。カスごときの分際が。」

やっと、裏人格（オレ）が登場か。

「よかろう、お前の質問に答えてやろう。おれの名前は、３年１３組の都城王土だ。」

こいつって、人間扱いしなくていいよな。そうすればオレが殺（や）っても罪にはならないしな。というより、マジ殺してー。だから、

「名前なんかどうでもいい。カスの名前など覚えるだけ無駄だ。」

ざまーみろ。何ならもっといたぶってやろう。

「とにかく、オレの視界から失せろ。」

「王に対してこの態度か。よかろう、王と愚民の違いを見せてやろう。」

「だから、きもいって。第一王を気取ってんなら、もっと謙虚になれよ。っていうか、マジで、きもい、『跪け』きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きも

い、きもい、『平伏せ』きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい、きもい。」

「？？二度のオレの攻撃が効かないだと？」

（突っ込むのそこなんだ。）

「というわけだ。お前にまったく同じことを言ってやるよ。王に対してこの態度か。よかろう、王と愚民の違いを見せてやろう。」

「は、笑わせてくれる。お前ごときが、このおr『跪け』ッグハ！！な、何？？」

樹が『跪け』といったとたん、自称王が、地面にめり込む。

「これでも、まだ手加減してやったんだ。感謝しろ。あと、フラスコ計画で、スパコン使いすぎだ、カス。」

「なぜお前がフラスコ計画のことを？」

「さーな。今日のこと、理事長に話すとしてもできるだけ裏人格（オレ）は巻きこむなよ。」

「ふん、ならばお前の名前は？」

「二子樹、1年1組だ。」

「1組だと??」

「悪いか?」

「いや、少しきにn『平伏せ』ッグハ!!な、何!!」

だが、王土が前を見たとき、そこには誰もいなかった。

「はー疲れた。これで、オレの恨みの1厘ほどは、果たせたな。最後に、アイツの驚く顔見たかったなー。じゃ、そろそろ、選手交代(バトンタッチ)だ。」

樹の人格が元に戻る。

「あっ、あれ王土は、どこ行ったのかなー。まーボク、あん時怖かったしいっか。」

そのころ神

「よく考えれば、裏人格(アイツ)も異常、元から持ってんじゃん。」

だいだいオレは神だとか天才だとかといってる奴に限って実はたいしたことない

異常紹介

選手交代（バトンタッチ）

特定の人間と場所を入れ替えることができる。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

樹「動物なんか二度と近づいて来るな。」

めだか「私のところには、なぜ動物が近づいてこないんだ？」

善吉「そんなんなら、足して二で割れ。」

樹&めだか「それができればこんな苦労はせんわ！！！」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

今日も、いつものようにただただ普通に登校した。だから、今日はボクにとって厄日の始まりだとはまだ気付かない。

ボクは、今生徒会室にいる。理由は、ご想像にお任せします。まー強いて言うなら成り行き。そう、成り行きでここにいる。そこに、今日もあの女がきた。

「今日も、依頼が来てるぞ。ところで、樹は、何だ？その服装。」

「これですか？ただ制服の下にじゃーｚ「で、デビルカッケー。」」

「善吉？」

「これ、めっちゃカッケーじゃん。」

「さすが、善吉。この美的センスが分かるか。まさに時代の最先端ってやつだろ？」

「確かに」

「この服は、・・・・」

五分後

「・・・、というわけ何だよ。」

「確かに、デビルカッケー。」

「（私には、ただ時代についていけててない気がするが。）ところで、二人とも。」

「「なに？」」

「今日の依頼だが、犬が迷子だそうだ。私が動物嫌いなことは二人も知っておるだろう？だから、頼んだぞ。」

そして、目撃情報のあった庭に三人は、向かう。えっ！1人多いって？それは、なんでか不知火が、ついてきたからだ。

「善吉。犬はどこにいるんの？」

「え～と確か庭の近くで見たっていう目撃情報が・・・」

「ん？」

まさか、あれが？（知ってるから憎まれ知らずはＯＦＦにするけど）

「あの犬だね☆」

御察しの通り、ボクらの前には、犬なんかいなかった。その代わ

りに、腹をすかけた獰猛な犬（モンスター）がいた。

「あれは、犬じゃない。お願いです。今すぐ、そこのバケモノを抹消（け）してくれええ！！！」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

最後の文?字稼ぎのようで字稼ぎでない。いや、すいません。あれはもろ字稼ぎです。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

ちょっと、今回は長めです。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

「あれは、犬じゃない。お願いです。今すぐ、そこのバケモノを抹消(け)してくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

「どうした、樹？っておい！何だあの犬(モンスター)は。まさかと思うが、あれが迷子の犬か？」

「きっとそう。でも、あれは本当に犬なの？」

涙目のボクは、この時点で今日の運勢を悟ってる。

「（あの、―クソ神（見習い）が。今度会ったら、この借りは返さないとなー（笑））」

そのころ神は、

「ヘクシュン！なんだか、ボクに対する、すさまじい殺意を感じる。」

「樹、どうしたの？目が怖いよ☆」

「いや、なんでもないよ。っで、この犬(モンスター)を早く捕まえてくれ、善吉。」

「おい、オレに任せるなよ。て、めちゃくちゃ犬機嫌(モンスター)悪そうだぞ。

」

「さっきから、二人とも犬(モンスター)って言ってるけどあれはボルゾイという犬だよー☆別名ロシアンウルフバウンド」

「「ウルフって入ってんじゃん！！！」」

二人の息ぴったり。と思ったとたん、

ガルルル！！！

鳴き声怖っ！！

「ほら『こっちにおいでよお兄ちゃん！一緒に遊ぼうよ！』って言ってるよ☆」

「いや俺には『人間ども！今度俺の眠りを妨げたら噛み殺すぞ！！！』って聞こえるね。」

「ボクには、『あの、善吉って言う人間と一殺し合い（遊び）たい！』って聞こえる。」

「樹。オレは、今のお前を仲間と思っていいのか？」

「うん。善吉は、今ボクの大切な囮(なかま)だよ。」

「もういい。っで、本当にあいつ捕まえんのか？あきらかに死亡フラグ立ってんだけど。不知火は手伝ってくれるんだよな。」

「え？あたしが？やだよ？あたしは親友のあんたが酷い目にあう

のを笑いながら見ていたいだけの人間なんだから☆」

「お前、本当に友達か？」

「もちろん。大切な道具（ともだち）だよ☆」

「“ともだち”の字は何だよ！」

「捕まえにいくときに、これを持っていって欲しいの☆」

そういって不知火が取り出したのは・・・

☆ソーセージ☆

「なるほど！こいつを餌付けに使うわけだな！！」

「んーんそうじゃなくてさ！これをお腹に仕込んでね「ぎゃぁぁぁ！！！内臓喰われたーーー！！！と見せかけて実はソーセージでした☆」っていうギャグをやってほしいの☆」

「そのギャグさぁ、やった2秒後にマジで食われるよな？これが、お前流道具（オレ）の使い方か。」

「そうだよ☆」

「ひでぇ。・・・・・くそっ！行くしかねぇか。不知火！そのソーセージ貸せ！」

「善吉。『行くしかねぇか』じゃなくて、『逝くしかねぇか』でしょ？」

「いや、まだオレの人生始まったばかりだから。」

「安心して。君が死んでも、自殺扱いにしてもらうから。」

「オレ、お前にそんな恨みを買った覚えがないが。」

『へぇー覚えてないんだ。この前、不知火と3人で昼食をとりに行ったとき、ボクを裏切ったくせに。』

「なーーー！！！あれは、すまなかった。オレの財布も寂しかったんだ。ごめん。」

『ボクの諭吉さん、どうしてくれるかなー。』

「わかった、金払うから。」

『いいよ。それよりも早く善吉の死に様（まんざい）、見せてくれよ。』

「その後、善吉は、見事な死に様（まんざい）を披露して、旅立って行ったのだな。」

「そういうことです、めだかちゃん。」

「おい、オレはまだ生きてるから！勝手に殺すな（まー死にかけたが）」

「っで、犬の確保は？」

「無理だった。っていうか、あれは犬じゃない。」

「でもこのままじゃまずいよ。近いうちに保健所が動き出すだろうし。」

「保健所だと？」

「確かに保健所行きってのはかわいそうだな。よし二人とも行くぞ！」

「だめだよ、善吉が死ぬのはいいけど、今度はボクまで死んじゃうよ。」

「ふむ。樹が死ぬのは困るな。」

「おい！二人とも、オレが死んでも困らないのか？」

「「もちろん（うん）」」

「ち、ちくしょー。」

「いや、善吉。そこで悲しむって、自意識過剰すぎるよ。」

バキッ　！！

「何の音だ？」

「善吉の心が折れたんだよ（笑）そっとしておいてあげてね。」

「ああ、分かった。では本題に戻すが、

この件は、私も動こうではないか。」

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

不知火「ねえねえ、なんで途中、樹が『』で話してたの？」

作者「『』の部分は善吉へのすさまじい憎悪を表しています。」

樹「あれは自業自得だよ。まー諭吉さんの恨みってやつだよ。」

善吉「じゃあ、なんで途中からあんなに毒舌になったんだ？」

樹「あっ！善吉生きてたんだ。」

善吉「おい、作者。どうなってんだ。」

作者「ただ、単純に君を痛めつけるために、見稽古で不知火の毒舌をコピーしただけです。」

善吉「そんなかんｔ「「「うるさい！」」」、すいません。」

→これは、樹&不知火&作者

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

めだかちゃんも参加し、第二回犬捕獲（モンスター）大作戦決行中。

「で、なんだその格好は？」

な、なんとめだかちゃんが犬の格好で登場！（ボクは原作を知っているので驚かないが）これも、ある意味犬（モンスター）だよね。

「ターゲットに仲間だと思ってもらう作戦だ！動物と触れ合うにはまずこちらが動物の立場にたって考えてみることが大切だからな。」

な、なんてバカなんだー。この人って天然だよね。というか、天然以外のなにもでもない。

「なんだ？樹。この作戦、不満でもあるのか？」

「い、いやー。この作戦のほかに何か秘策でもあるんですか？たとえば、麻酔とか。」

「ない。」

「で、ですよねー。」

ボクは、今日学んだ。この人、異常であり、異常（てんねん）だ。

っと話している間にも犬発見（ターゲット）！と思ったら、散歩中の犬だった。

「しかし、あれがこんかいのターゲットか。」

「「いや、絶対に違います（違うから）！」」

誰だよ、こんなところで犬の散歩してんのは。いくら、小さいからってボクには怖い。やっぱ動物は、無理だなー。（憎まれ知らず（アンリセント）は、ＯＦＦにしてある。）

「この犬、かわいいなー」

「善吉、こいつがかわいいなら犬（モンスター）もかわいがってやれ。」

「いや、あれとこれとは別だから。」

「だか、樹。確かにかわいいぞ。」

そういって、犬に近づく。すると・・・。

まー、御察しください。

さっき、めだかが近づくにつれて犬が後ずさりしていたが、

「さぁ怖くないぞ！！一緒に遊ぼうじゃないか！」

ついに耐え切れずに、善吉の後ろに隠れたんですよ。（ボクじゃ

なくてよかった。）

と思ったのも、つかの間なーんか見覚えのある犬がボクの後ろにいたんですよ。

「い、樹、後ろ！」

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「あれが、いぬか（ターゲット）。さぁ怖くないぞ！！一緒に帰ろうじゃないか！」

「！！！」

残念ながら、これは、犬の驚き（モンスター）ではない。ボクの驚きだ。なんで憎まれ知らず（アンリセント）はＯＦＦにしてあるのにボクに懐いてんだー。

「・・・というわけで犬は無事飼い主の元に帰（モンスター）りました。まぁとりあえずは一件落着かなと。えーと大丈夫かめだかちゃん。生きてるかー」

めだかちゃんは、めっちゃプルプル震えてる。

「私は、あんな可愛いわんちゃんにもなついてもらえないなんて、私はどうしようもなくダメな人間だ・・・」

えーとめだかちゃん、まーとりあえず・・・

「えーと大丈夫か樹。自殺するのはまだ早いぞー」

ボクは、周りにどす黒い負のオーラを出していたそうだ。

「ボクは、どんなに生き物に懐いてもらえても受け入れることができないなんて、ボクはどうしようもなくダメで、クズで、底辺にしか存在してはいけない人間だ。うん、よし、死のう！」

だ、ダメだコイツ。めだかちゃん以上に自虐的になってるし・・・。なんだか、二人対照的だなー。めだかちゃんは、動物が好きなのに動物がめだかちゃんを苦手なのに対し、樹は、動物が苦手なのに動物が樹を好きだなんて。これこそ、足して二で割りたいね。

「「それができたら、こんな苦労はしない！！！」」

そんなことで、善吉は僕たちを2時間慰めなければならなかった。

動物が好きなのに動物に怖がられている奴もいれば、動物が嫌いなのに動物が近

作者「憎まれ知らず（アンリセント）の弱点発覚です。（樹だけですが）動物が好きになるのにＯＮ，ＯＦＦはつけれないのだー（笑）」

樹「作者死ねーーーーー」

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずにやられると案外簡

祝ＰＶ１２０００、ユニーク２１００

読者の方々本当にありがとうございます。感想、募集中です。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずにやられると案外簡

「あれ？ここは、どこ？」

ボクは、真っ白な世界にいた。まるで、転生のときにいたあの空間のようだ。でも、ボクは確か寝ているはずなのに。

「そうだよ、君はまだ寝ている。つまり、夢の中ってことさ。」

振り向くとそこには1人の少女がいた。

「あなたは、「知ってると思うけどボクは安心院なじみ。平等なだけの人外だよ。」ですよね。ここには、腑罪証明（アリバイブロック）を使って来たのですか？」

「もちろん。でも、君に危害は与えないよ。ただ・・・」

「ただ？」

「ボクのスキルを受け取ってほしいんだ。」

「え？でも、ボクは別にスキルには困らないんです。それから、無効脛（ライフゼロ）で、ボクの憎まれ知（アンリセント）らずを無効化しているみたいですけど、無駄ですよ。」

「なるほど、君の見稽古（アイゲーム）は、チートだね。」

「（あなたのほうがチートだと思うんだけど。）」

「ボクも、そしてめだかちゃんもチートだけど君には及ばない。それをまだ気付いてないだけさ。」

「心読むのが好きですねー。でも、ボクそろそろ帰りますんで。」

「それじゃ、また会おうね。それから、ボクのことは親しみをこめて『あんしんいんさん』と呼びなさい。」

「では、さよおｒ」

ボクは誰かに言葉を遮られた。いま、ボクの唇はボクのものではない。

「って、なにキスしとんじゃー。ボクの、ボクの大切なファーストキスを奪いやがって。このチートクソババァが。」

「大丈夫。これも口写し（リップサービス）だから。」

「っで、どんなスキルをくれたんですか？」

「それは、絶対防壁（リフレクトブロッカー）さ。あ、もうそろそろ時間だ。楽しかったよ、最後に・・・」

ボクの意識はここで途絶えた。

朝から、騒がしい目覚ましの音で起き上がる。さぁ、楽しい一日の始まりだ。

ファーストキスは人生で一度だけなのに、何の心構えもせずにやられると案外簡

作者「絶対防壁の説明は次回でいいでしょうか。」

樹「お、ついにネタ切れですか。」

作者「そんなことあるわけないでしょう（汗）」

結局紹介します。

絶対防壁（リフレクトブロッカー）

あらゆるものを固めることができる。寒天状であるため、反射可能

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

これもでのスキルのまとめです。

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

二夕子樹　表人格

異常（アブノーマル）

見稽古（アイゲーム）

見ただけで、相手の異常や過負荷を使うことができる。また、それと同時に、弱点も見極められる。ただし、最初の１回は、５０％しか使うことができず、異常や過負荷自体を無効にすることはできない。現世で、すでに使っており、皆から恐れられていた。ちなみに、相手の技、運動能力等もコピー可能。

憎まれ知らず（アンリセント）

神に転生するときにもらった。どんな動物にも敵視されない。ただし、人間には無効。また、自分は過負荷の対象にされない。これは、ＯＮ、ＯＦＦの切り替えができる。（動物に対するＯＮ，ＯＦＦは効かない）

絶対防壁（リフレクトブロッカー）

安心院さんからもらった。あらゆるものを固めることができる。寒天状であるため、反射可能。使い道として、盾、足場、食事などに使える。

過負荷（マイナス）

？？？

二タ子樹　裏人格

過負荷（マイナス）

裏切りの楽園（トレチャリーティル・ナ・ノーグ）

異常のみ、相手から奪い使うこともできる。これも、ＯＮ、ＯＦＦ可能。また、無効にできない代わりに、奪った異常は２００％使うことができる。これは、安心院さんにも有効。さらに、人も操ることができる。（１人だけ）

異常（アブノーマル）

選手交代（バトンタッチ）

特定の人間と場所を入れ替えることができる。ただし、相手を認識しなければならない。表人格から、変わるときに使用。

これまでのスキルのおさらい、といいながらただまとめただけじゃん！！

ちなみに、絶対防壁の食事とは液体（甘いもの）をゼリーに変えます。作者は、ゼリー大好きなんです。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね　上

阿久根先輩、ドンマイ。
（話を読んだら分かります。）

えーと、簡潔に言おう。今、ボク達は柔道場にいる。もちろん、反則王こと、鍋島先輩からの依頼があったからだ。

ちなみに、なぜボクがこんなに生徒会と生活することが多いかというと、晴れて副生徒会長になった、なーんてことはなくボランティアですよ。めだかちゃんたちにも許可を取っているのでＯＫなんですよ。まー実際のところ、原作での数多くの名シーンを見たいんですよ。というわけで、生徒会と一緒に行動中。

「やーやー。ようこそいらっしゃいました。ウチが差出人の鍋島猫美でっす。本日はどーぞよろしく。」

あれが部長の鍋島さんか。どちらかというと弱そうなんだよね。

「生徒会長の黒神めだかだ。今日は出来る限りのことをさせてもらおう！」

なんでめだかちゃんは、先輩にも敬語を使わないんだ。どう考えても失礼だと思う。

「うんうん。頼りにしてるで生徒会長！」

握手してる。なんかこうやって見ると同級生みたいだよね。

「あれが反則王と呼ばれた鍋島さんか。優しそうな人だなぁ。」

「たしかに。」

「ウチは、そんな怖い人やないで。あ、そういやジブンに挨拶したいゆー奴おんねん。阿久根、阿久根クン。」

さすが、阿久根先輩。超美男子じゃん。ところで善吉はどうかな？あの二人、犬猿の仲だし。というか、すでに善吉は、敵対オーラ放ってる。

「ご無沙汰しておりますめだかさん。生徒会立ち上げの大事な時期にあなたに会いに行くのは迷惑になると控えておりましたが、あなたとの再会を心待ちにしておりました。」

善吉は気持ち悪そうな顔で見てる。正直原作を知っているボクも気が引く。だって、さっきの言葉、誠意にあふれてるもん。

「硬苦しい真似は止せ阿久根2年生。貴様ほどの男がそのように振舞っては示しがつくまい。」

「いえ、このような振舞いを恥とは思いません。今の俺があるのはあなたのおかげです。めだかさんには感謝してもしきｒ「私に感謝してるのならば頭を下げるな！！！もっと胸を張れ！！」は、はい！めだかさんの御心のままに！！！」

やっぱあの人Ｍだ。いや、ドＭだ。めだかちゃんの前だとプライドの欠片もないんですね。

「おっと再会を喜んでる場合ではないな。生徒会を執行せねば。後継者。つまり新部長の選定だったな。とりあえず貴様は特別枠だ阿久根2年生。善吉との再会を楽しんでくるがよい。」

そして、感動？の再会。

「久しぶりだね。えーとキミ誰だっけ？」

「人吉善吉ですよ。ところであなた一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出してるようだな。言っておくがめだかさんの支持率が１００％に達しなかったのは１００％キミのせいだぞ！」

「カッ！あんまり意地悪言わないで下さいよ。有名な柔道界のプリンスさんが下級生いじめなんてファンの子が知ったら泣いちゃいますよ？」

ところで、めだかちゃんは、阿久根先輩に善吉との再会を言っていたのに、なぜボクが二人の板ばさみになっているんだ。ここ、ものすごく居づらい。

「ところで、キミは？」

「えーと、１年１組二タ子樹です。よろしくお願いします。」

「柔道部、２年１１組阿久根高貴だ。こちらこそよろしく。」

そういって、ボクと阿久根先輩は握手をする。そういえば、さっきから阿久根先輩の顔が赤い気が。

「いやぁ、それにしても一姫ちゃん行儀が良くていいなぁ。キミと違って！」

「あのー阿久根先輩、言葉じゃ分からないかも知れませんが一姫じゃなくて樹ですよ。」

「っていうことは、「ボクは男です。」ごめん、すまなかった。」

『別にいいですよ。阿久根先輩は、ボクの禁断のスイッチを押しただけですから。』

そのころ、柔道場では柔道部員が積みかさなって倒れていた。誰がやったかはいうまでもないよね。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね下

『別にいいですよ。阿久根先輩は、ボクの禁断のスイッチを押しただけですから。』

「おい、樹怖いぞ。」

『そう？』

「オレだってお前を見たとき、真っ先に女だと思ったぞ。」

『じゃーそこの先輩と一緒にボクに殺されてくれる？』

「阿久根先輩、ご愁傷様です。」

「善吉君、ボクを見捨てないでくれよ。」

『ちょっと口数が多いんじゃない？』

注意　これは、あくまで表人格です。まー女と間違えられたからこうなったんですよ（笑）

『作者も口数が多い。あと（笑）ってむかつく。』

訂正します。注意　かくかくしかじかでこうなった。

『許してあげるよ。』

「（これ、絶対意味伝わんないじゃん。）」

『無駄なつっこみいらないよ、善吉。』

「すみません。」

『そういえば、提案なんだけどせっかく柔道場に来たんだから柔道で決めてよ。』

「「なにを？」」

『それはもちろんボクの機嫌直（サンドバック）しに負けたほうがなってよ。』

「そりゃー名案やなー。」

鍋島先輩登場！

「二人が勝負すんだったら、ウチにも提案があるで。阿久根クンが勝ったら生徒会に入り代わりに人吉クンが柔道部に入って次の部長になるってどうや？。」

「そんなのm『善吉に拒否権はないよ。ついでだしいいじゃん。阿久根先輩なんだか喜んでるし。』ち、ちくしょーーーーー！！！。」

『これで、鍋島先輩の狙いも、僕の処刑（ねらい）も同時に達成ですね。』

「鍋島先輩もって、鍋島先輩まさか最初っからそのつもりで投書

したんですか？」

善吉も気づいたか。（でも、半分気付いてないぞ。僕の処刑の意味を。）

「うん！人吉クンみたいながんばり屋さんはウチはめっちゃ好きなんよ！」

「オレ、負ける前提じゃん！」

「『そうだよ（そうや）』」

というわけで、役職、そして生と死をかけた柔道対決の開始です。

「ルールは柔道部恒例の阿久根方式！！無制限十本勝負　対　無制限一本勝負！　阿久根クンに十本とられる前に一本でもとれたら自分の勝ちや人吉クン！」

「フン！尻尾をまいて逃げなかったことだけは褒めてやろう。ああ、でも虫に尻尾はなかったか。」

「なんですか、逃げるってありだったんですか？先に言ってくださいよ、そういうことは。」

「逃げる？そうなものありなわけなかろうが。」

めだかちゃん推参！！！・・・・さっき見たときより柔道部員の山が高くなってるし。

「人吉善吉、私は貴様に負けるなとは言わん！しかし逃げることは許さんぞ！」

確かにここで逃げるのは代償が大きすぎるぞ。プライドとか、めだかちゃんの信頼とか、命とか。

「そんなことわかってるよ！」

「・・・・それでは始め！！！」

さぁ、どっちが死ぬかな？

「先手必勝！！！」

ドカッ！

あーもう1本とられたよ・・・

「・・・・いやーそれにしてもさすが阿久根クン、綺麗な一本やなー。」

『さすが柔道界のプリンスと言われてるだけありますよね。』

「本当や。後の先取らせたら右に出るものはおらんわ。・・・・ホンマ天才的でつまらん柔道や。」

『・・・・随分天才が嫌いなようですね、鍋島先輩。』

「うん嫌いやで、大嫌いや。黒神ちゃんや阿久根クンのこともな。才能を努力で踏みにじりるためにウチは柔道をやっとんのよ。」

『努力かー。・・・・羨ましいですね。』

「羨ましいってどういうことや？」

『いや、気にしないでください。』

「そっか、まっ黒神ちゃんのような天才は天才同士、凡人は凡人同士でつるもうやないか。ウチの柔道に阿久根クンはいらん。ジブンにやるわ。そんかし人吉クンくれや。」

「ふむ、ならば安心しろ鍋島3年生。天才などいない。あと善吉はやらん。」

ところで、二人はどうなったかな。って、善吉もう9本取られてんじゃん！

「善吉！！」

く、来るぞ、あの名言が。

「いつ如何なる場合においても私は貴様に負けるなとは言わん！！！だから勝って！！！貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！困るぞ！泣いちゃうぞ！！！」

めだかちゃん、めっちゃ目ウルウルしてるよ。

「う・・・・あーもうわかったよ！！！お前の泣くとこなんて見たくないしな！！！」

「な、なに！？」

ドカッ！！

「文字通りアンタの足も引っ張ってもみました。ってところで何を認めてくれるんでしたっけ？阿久根先輩」

「・・・・・・・・・・負けを認める！一本取られたよ。」

ほんとにめだかの応援だけで勝った！（原作見てるから知ってるけど。）

「信じられへん。阿久根クンにホンマに勝ってしもうた・・・・いやそれよりウチも双手狩りならウチもよう使うけど人吉クンはあんなにも綺麗に・・・・」

「綺麗も汚いもないし天才も凡人もいない。いるのはただ懸命な人間だけだ。私も貴様も何も変わらんよ。」

『善吉、よく勝ったなー』

「オレ、やっぱ負ける前提だったの？いやさ、あんなこと言われたらもう勝しかないだろう。」

「じゃー次や。」

「「「『次？』」」」

「いやー二タ子クン。さっきジブン『努力かー。・・・・羨ましいですね。』って言ってたやろ。だからウチが努力の大切さをジブンに教えてやるんよ。」

『ってことは。』

「ウチと柔道で勝負や！っと言ってもさっきジブン、柔道着の着かたもあやふややったし初心者か？」

『もちろん。』

「ってことはウチは、手かg『必要ありません。鍋島先輩が勝ったらあれは免除にしますから』っそか。」

っというわけで柔道2試合目、スタート

『お互い手加減はなしですよ。』

「もちろんやで。ウチが努力の大切さを教えたる。」

「・・・・それでは始め！！！」

「いくでー、ニタ子クン。」

ドカッ！

「な、なんやと？」

結果は明確だった。ボクの勝ちだ。

『だから言ったじゃないですか、努力が羨ましいって。』

「樹、お前ほんとに初心者だよな？」

『もちろん。今日初めて見たよ。』

「でも、なんでそんなにうまいんや？阿久根クン、いやそれ以上の実力やったで。」

『柔道は、一目見た程度で十分です。』

「樹、貴様さっきから見た見たと言っているが。」

『ボクの異常は見稽古です。ボクは、努力しないでも見ただけでできてしまう。努力しない人間でなく努力できない人間なんです。』

というわけで、柔道場イベントも終了し新たな仲間？も加わる。

「阿久根先輩は、部活をやめたらしい。」

善吉が生徒会室の扉を開けると

「あー！！！！！な、なんでお前がここに居るんだ！！！」

生徒会室でなんか当然のように着替えてるし。
まさかあの人・・・・
「ン？あぁ人吉クンと二タ子クンか。キミを追い出すのはあきらめたが俺はめだかさんをあきらめたわけではないのでな。」
やっぱり・・・・・・
「本日生徒会執行部書記職に任命された2年11組の阿久根高貴だ。よろしくお願いします。先輩！！」
なんで、先輩なんだ。あと、
『覚悟はいいかい？ドM（ウザメン）後輩。』
その日、生徒会室から絶え間なく誰かの叫び声が聞こえたと言う。

ルールを破る人を卑怯者、卑怯者って言うけどばれなきゃいいんだよね下

少々長くて疲れたー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6296x/

異常で過負荷な臆病者と無礼者

2011年10月29日03時06分発行